汚される普天間基地フェンス

条例違反の反基地活動

鈍い市当局の対応

清掃ボランティアで日米協力

米軍新型輸送機オスプレイが配備されている米海兵隊普天間飛行場（宜野湾市）のゲートが絶えず反基地活動家らによる「フェンス活動」によって汚され、問題になっている。「フェンス活動」は市の条例違反で、宜野湾市議が市議会で市当局の対応を追及したが、毎週末、自主的に集まった人々が清掃をしても、翌週になるとすぐに汚されるという状況が続いている。一方、在沖米軍は米軍人の安全確保のため、県警本部に法整備要請に動きだした。同時に、地元と米軍による掃除活動ボランティアの輪が広がっている。

（那覇支局・豊田　剛）

米軍に感謝の花束を渡すフェンスクリーンプロジェクトの手登根安則代表（右）＝普天間飛行場野嵩ゲート前

「（オスプレイは）岩国へ」「出ていけ」「NO　OSPREY」「フェンス売ります」

普天間飛行場のフェンスに赤いテープで書かれた言葉の一部だ。毎週、金曜日になると、宜野湾市役所に近い普天間飛行場ゲート周辺のフェンスに、こうした「汚い言葉」が赤いテープやリボンで貼り付けられる。昨年9月にオスプレイが配備されて以来、反基地活動家らによる「フェンス活動」が続いている。最近では、日本政府が「主権回復の日」として決めたサンフランシスコ講和条約記念式典開催について「4・28屈辱の日」とテープに加え、中国共産党を思わせる赤い旗が刺さっている。

フェンスは沖縄本島の主要な幹線道路である330号線に面しており、車を運転してこのあたりを通るとすぐに目に付く。本土から沖縄に観光に来たある人は「こんなことが許されるのか。まるで中国共産党ではないか」と感想を漏らした。

こうした反基地活動家らの「フェンス活動」に対して、テープをはがすフェンス清掃のボランティア活動が動きだした。主催しているのは、フェイスブックなどソーシャルメディアを通じて集まった若者たちで、昨年12月から本格的に始まり、今年になって「反基地活動のやり方は何かおかしい」と感じた人々が次々と集まってきた。わずか2人で始まった活動は、「現在では多いときには40人を数える」（主催者）。

ところが、清掃活動に対する反基地活動家らによる執拗（しつよう）な妨害もある。

ある日、女性グループが東日本大震災における米軍のトモダチ作戦に対する感謝の言葉を記した横断幕を掲げて手振りをしていると、反基地活動家が「ここから出て行け」と怒鳴り声を上げ、「よそから来た者が余計なことをするな」と敵意をむき出しにする出来事があった。

フェンスの赤テープが景観を損ねていることを問題視した地元小学校のPTA役員によると、反基地活動家の多くは元教師で、県外から活動のために駆けつけている元日本教職員組合員が多い。「なぜテープ貼りをしているのか。汚いではないか」と反基地活動のメンバーに話しかけたところ「平和を求めるためテープ貼りをしている」と反論。ゴミを散らかすことについては「これも抗議の手段」と自分勝手な理屈をつけて、町の景観を汚すことに反省のそぶりなど見せなかった。

基地反対派によってリボン・テープだけでなく大きな赤い旗がくくり付けられている＝普天間飛行場野嵩ゲート前

ゲート清掃ボランティア団体のひとつ「フェンスクリーンプロジェクト」代表の手登根安則氏は、「基地に反対すること自体を否定するものではない」と前置きした上で、「地元警察はゲート前に立っているが、テープ貼りの現場を見ても見ぬふりだ」と苦言を呈した。

フェンスの中と外には使い終わったテープのロールや菓子の袋、ペットボトルが捨てられている。フェンスに近い木には凧（たこ）が引っかかっていた。手登根氏によると、1回の清掃で大きなゴミ袋が何枚も必要になる。

現場を確認した宜野湾市選出の又吉清義県議は、「フェンスにくくり付けられたリボンにはガラスの破片やナイフなどの危険物が隠されていた。一歩間違えれば命の危険につながる」と語る。また、フェンス内にゴミが投げ捨てられていることについて、「日本人としてあるまじき行為だ」と断罪した。

こうした反基地活動家による「フェンス活動」とこれに対する宜野湾市当局の対応が同市議会でも問題になった。呉屋等宜野湾市議は3月の市議会一般質問でフェンスを汚す行為と対応について市当局に問いただした。市当局は、「こうした行為を承知している」とした上で、「ポイ捨てのない快適なまちづくり条例」に違反するとの認識を示した。確かに、条例第7条には「何人も、みだりに空き缶、吸殻等ポイ捨てし、又は落書きしてはならない」とあり、市長の指定する職員に従わない場合は、「3万円以下の罰金に処する」と明記されている。しかし、自治労の強い市当局は、「パトロールを含めて対策を検討している」と言うものの、具体的な取り締まりは今のところ確認されていないのが実情だ。

一方、在沖米軍トップのケネス・グラック4軍調整官（中将）はこのほど、沖縄県警本部を訪れ、「抗議活動が軍人・軍属及び日本人基地従業員の安全を脅かすもの」だとして、基地の出入りの際の安全を確保するための法整備を求めた。

地道なボランティア活動は国境を超えて共感の輪が広がっている。初めはフェンスの中から見ていた海兵隊員も最近では外で清掃活動を手伝うようになった。在沖米軍がこのほど結成したバイク愛好家も活動に定期的に参加している。3月下旬には、普天間基地司令官のジェームス・フリン大佐の姿もあった。フリン大佐は「日米両国民が力を合わせてフェンス掃除をしている姿は日米友好の象徴的な光景」と目を細めた。